

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02359

研究課題名(和文)「戦争画」概念を問い直すーアジア太平洋地域の比較調査から

研究課題名(英文) Reconsidering the concept of "War Painting"

研究代表者

北原 恵 (Kitahara, Megumi)

同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員

研究者番号：30340904

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトの目的は、アジア太平洋地域の戦争画研究とそれに関する作品を調査することによって、軍事主義やポストコロニアルの視点から日本の「戦争画」研究そのものを捉え直すことにある。具体的には、アジア太平洋地域における戦争画研究と作品調査、戦争を経験し複数の土地に移動した日系美術家の調査、「戦争」をテーマにした現代作品の調査・聞き取り、戦後の「戦争画」言説と分析概念の検証(「戦争画」「前線/銃後」等)。以上を踏まえて「戦争画」研究の問題点を明らかにし、理論的組替えを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、歴史学やポストコロニアルの成果を取り入れ、「戦争画」「戦争」概念を再検討し、アジア太平洋地域の戦争画の研究者と共同研究することによって、依然として「日本」一国的なアジア太平洋戦争期の戦争画研究の限界を克服する。

1940年代後半を「戦後」とみなすのは、ある限定された立場の認識に過ぎない。本研究では「占領期美術」の概念を持ち込み、1945年以降アジア太平洋地域で起こった朝鮮戦争やベトナム戦争と美術への影響をグローバルに考察し、「戦争画」研究を狭い時期区分と対象から解放することを試みた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project is to rethink the study of Japanese "war painting" itself from the perspective of militarism and postcolonialism by surveying war painting studies and related works in the Asia-Pacific region. Specifically, this project will: 1) survey war painting research and works in the Asia-Pacific region; 2) research Japanese American artists who experienced war and moved to multiple locations; 3) survey and interview contemporary works on the theme of "war"; and 4) examine postwar "war painting" discourse and analytical concepts ("war painting," "frontline/post-gun," etc.). Based on the above, I attempted to (5) clarify the problems of "war painting" studies, and make an attempt at a theoretical reconfiguration.

研究分野：Art History

キーワード：戦争画 ジェンダー 女性美術家 マッカーサー元帥レポート 長谷川春子 谷口富美枝 新井光子
日本美術会

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近代以降の日本の戦争画についての研究は、これまで美術史家を中心に実証的研究が着実に積み上げられてきた。とりわけ、1994年の美術史学会全国大会シンポジウム「戦争と美術」を画期として、1990年代半ばから美術史研究のアカデミズム内で急速に進展した。戦争画の大画面の様式に注目した河田明久や通史を試みた丹尾安典らの研究は、それまでの「日本近代美術史の空白部分」と呼ばれた研究状況に風穴を開け、その後の研究の土台を築いたと言えよう(丹尾・河田『イメージのなかの戦争』1996)。その後、戦争記録画に集中していた戦争画研究は、地域(植民地・占領地)時代(日清・日露戦争)素材(日本画・彫刻・戦争キモノ)資料(占領期GHQ/SCAP文書)において研究対象を拡大し、同時に若桑みどりや千野香織らによってジェンダーの視点が導入されたことにより、戦時下のジェンダー表象と女性美術家の研究が進展した(若桑みどり『戦争がつくる女性像』1995)。

それらの研究は美術史学会だけでなく、表象文化論学会、ジェンダー史学会、美学会、カルチュラル・スタディーズ学会などにおいても個別研究が蓄積され、研究はさらに多様化・深化している。1990年代から2000年代にかけての諸研究の成果は、『戦争と美術 1937-1945』(針生一郎他編、2008)にまとめられ、戦時中の女性画家に関する研究も進展している(小勝禮子「奔る女たち - 女性画家の戦前・戦後 1930-1950年代展」2001; 吉良智子『戦争と女性画家』2013)。

だが、重要な成果が存在し、研究は対象を広げてさらに緻密化しているものの、依然として一國主義的でグローバルな視点の欠如と理論不足は否めない。一方、文化人類学やフェミニズム地理学の研究に見られるように、ジェンダーの視点から「空間」を再検討する視点(カレン・カプラン『移動の時代 - 旅からディアスポラへ』2003年)や、テッサ・モーリス=スズキの帝都型思考様式を覆す挑戦は、視覚表現の分析に大変重要であるにもかかわらず、日本の美術研究の分野では映画や大衆文化における視覚分析や文学研究に比べて、著しく遅れてきた。

2. 研究の目的

本プロジェクトの目的は、アジア太平洋地域の戦争画研究とそれに関する作品を調査することによって、軍事主義やポストコロニアルの視点から日本の「戦争画」研究そのものを捉え直すことにある。具体的には、(1)アジア太平洋地域における戦争画研究と作品調査、(2)戦争を経験し複数の土地に移動した日系人美術家の調査、(3)「戦争」をテーマにした現代作品の調査・聞き取り、(4)戦後の「戦争画」言説と分析概念の検証(「戦争画」「前線/銃後」等)、以上を踏まえて(5)「戦争画」研究の問題点を明らかにし、理論的組替えを試みる。日本の戦争画研究はこの約30年間で急速に発展・多様化し、実証的研究と図像分析は精緻化しているが、対象へのアプローチなど視点が固定化し語りの定型化が見られる。過渡期にあると言える現在、具体的作品の分析を通して理論化をはかる。

3. 研究の方法

研究に当たっては、以下の3つの視点を重視した。

- (1)「空間」「移動」の連続性の探求によって一國主義的研究を克服する。
本研究は、歴史学やポストコロニアリズムの成果を取り入れ、「戦争画」「戦争」概念を再検討し、依然として「日本」一國主義的なアジア太平洋戦争期の戦争画研究の限界を克服する。日本の戦争画研究が英語に翻訳されることはあっても、アジア太平洋地域の戦争画の研究者と共同研究することはこれまでほとんどなかったのである。
- (2)グローバルな視点で「戦前/戦後」の時間的切断と連続性を検証する。
1940年代後半を「戦後」とみなすのは、ある限定された立場の認識に過ぎない。本研究では「占領期美術」の概念を持ち込み、1945年以降アジア太平洋地域で起こった朝鮮戦争やベトナム戦争と美術への影響をグローバルに考察し、「戦争画」研究を狭い時期区分と対象から解き放つ。
- (3)大学とミュージアムの現場をつなぎ、戦争表象の批判的視点と実践を次世代に継承する。
申請者は大学内に留まらず多数の学芸員と協力関係を持ち、展示実践と調査・研究発表を繋ぐ試みを行ってきた。美術館の企画展と連動させた研究会を開催し現場と大学の相互発展を図る。

(1) 方法論は以下の通りである。

資料調査：アジア太平洋地域における戦争画の調査。現代の戦争画。

(2)比較調査：日本国内での「戦争画」をめぐる言説・研究分析と問題点の解明。韓・台・中・豪・米の戦争画研究の状況を把握し比較検討する。

(3)理論研究：「空襲/空爆」「前線/銃後」概念の検証、及び、ジェンダー、ポストコロニアリズム、

移動理論を援用して、「戦争画」概念の再検証と理論化をはかる。

4. 研究成果

予期せぬ COVID19 の流行のために、海外調査を断念せざるを得ず、当初の研究計画は大幅に遅れたが、国内調査を深め、期間を延長することによって、多くの成果を出すことができた。

【2017年度(平成29)】

初年度は、これまでの科研を継承・発展させるため、研究体制の構築と国内調査、及び、米国と台湾の国際学会で発表を行なった。具体的には、

(1) 2018年3月20日~27日、米国ワシントン DC で開催された、AAS での発表"Postwar U.S.-Japan Collaborative Production of "War Painting" for the Reports of General MacArthur" (パネル名: Rethinking the Scope and Significance of "Sensoga"(War Painting) During the 15-Year War)、及び調査。

(2) 2017年10月7日、台湾・国立台北教育大学で開催された国際シンポジウム「日本近代洋畫の養成及發展」において、「戦争画」概念再考—「空襲」は銃後の凶像か」を発表。10月8日、国立台北教育大学で開催された国際シンポジウム「The 2nd International Forum for war visual in Asia-pacific Area」で“Increasing Contemporary War Paintings and War Memories in Japan”を発表。

(3) 国内調査は、 鞆の津ミュージアムでの「原子の現場」展調査。 かにた婦人の村(千葉県・館山市)で、戦時中の海軍の壕や碑の調査、及び「夢を見る—二人語り」の公演調査。 埼玉県立図書館(熊谷分館)、跡見学園女子大学新座図書館、埼玉県立近代美術館ほか調査。 国立歴史民俗博物館の国際研究集会「歴史展示におけるジェンダーを問う」に参加。

(4) 海外調査は、ベトナムの戦争表象調査(ホーチミン市:南部女性博物館、The Factory: Contemporary Art Center、Ben Duoc 寺院調査。ダナン市「英雄の母」モニュメント調査。ハノイ市:女性博物館、革命博物館、歴史博物館調査)8月29日~9月6日。調査結果の一部を以下に発表。北原恵「ベトナムの現代史と難民を表現する リー・ホアン・リー個展」『ピープルズ・プラン』78号、2017年11月。

(5) これらの調査は、以下の論文として発表・出版。北原恵「なぜ女性の偉大な戦争画家がいなかったのか—谷口富美枝の場合」『美術手帖』vol.69, no.1061, 2017年11月、北原恵「日本画家・谷口富美枝の思い出、足跡をたどって—船田富士男氏に聞く」『待兼山論叢(日本学篇)』2017年12月、北原恵「"モダン"と"伝統"を生きた日本画家—谷口富美枝(1910-2001)」『開館35周年記念、呉市立美術館術間のあゆみ展』講演会、呉市立美術館。

【2018年度(平成30)】

2年目は、戦争画研究状況と作品調査、研究発表・出版を行った。

(1) 海外調査は、2018年12月、台湾調査(台湾ビエンナーレ、台北ビエンナーレ、「再基地: 当実験成爲態度展」台湾当代文化実験場、2.28 国家記念館他)。2019年2月、キューバ調査(国立ハバナ美術館、革命博物館など革命表象調査)である。国内では、2018年6月、東京都中央区郷土博物館が所蔵する長谷川春子に関する100点以上の資料の調査を行い、これまで全く知られていない資料も発見され、貴重な資料群を確認することができた。7月、大田区立龍子記念館にて、青龍社や谷口富美枝に関する資料調査。12月、東京国立近代美術館にて、「アジアにめざめて」展・国際シンポジウムに参加。東京写真美術館にて、「愛について: アジアンコンテンポラリー」展、福岡アジア美術館の「闇に刻む光」展など、アジア関係の展覧会調査も行った。

(2) 戦争を経験し複数の土地に移動した女性美術家については、2018年12月8日開催の国際シンポジウム「環太平洋の日系ディアスポラ・アート」において、「谷口富美枝(1910-2001)」についての“Trans.”: 日本/USA に生きた女性日本画家」を発表(主催: 京都大学人文科学研究所 科研費基盤(S)「人種化のプロセスとメカニズムに関する複合的研究」)。ローラ・キナ(米デポール大学)をはじめとする北米やブラジルの美術史研究者らと研究交流を継続中である。ローラ・キナの活動については、北原恵「沖縄のディアスポラ・フェミニストが創る世界: ローラ・キナ」『ピープルズ・プラン』81号、2018年5月。

(3) 谷口富美枝については、カンザス大学スペンサー美術館の紀要 *Register*(査読有)での出版に向けて準備した。

(4) 韓国で拙論「アジア・太平洋戦争期における「御前会議」の表象: 「戦争画」とは何か」を所収した『戦争と美術』が2019年2月に出版された。

2019年2月28日(北原恵「アジア・太平洋戦争期における「御前会議」の表象—「戦争画」とは何か」キム・ヨン Chol 他『戦争と美術—ビジュアルの中のアジア太平洋戦争』現実文化研究)

(5) 空襲表象から「戦争画」概念を再考する論考を出版。北原恵「戦争画」概念再考—「空襲」は銃後の凶像か」坪井秀人編『東アジアの中の戦後日本』(戦後日本を読みかえる5)臨川書店、

2018年7月。

(6) 関連研究の発表として、11月に韓国・済州 4.3 平和記念館で行なった講演が、出版された。「戦争「体験」を描く絵画——沖縄・広島・空襲の「記憶」」(「戦争「体験」を描く絵画——沖縄・広島・空襲の「記憶」」) 済州大学平和研究所『平和研究』第29巻第1号 <企画特集>、2019年2月

【2019年度(平成31/令和元年)】

(1) 3年目の2019年度は、初年度のAAS (Association for Asian Studies)での研究発表、2年目(2018年度)のディアスポラ・アートに関する国際シンポジウムでの発表に続いて、カンザス大学スパンサー美術館の紀要で、英語圏で初めての研究論文となる谷口富美枝論を出版したのが大きな成果として挙げられる(<https://indd.adobe.com/view/a0a8cd94-97ab-4831-8764-d8f0b210eaf0>)。Megumi Kitahara, “Between Tradition and Modernity: Tracing the Artistic Career of Taniguchi Fumie” in *Register*, Kansas University, 2019.

(2) 国内調査は、あいちトリエンナーレ調査(名古屋市美術館、愛知芸術文化センター、豊田市美術館) 「岸本清子」展調査(愛知県立美術館) 同時代史学会「戦争の記憶をめぐると同時代史」参加(日本大学) ジェンダー史学会大会「象徴天皇制/君主制とジェンダー」参加(専修大学): 三鷹市内吉田家にて吉田博の戦争画関係の資料調査(播磨造船所でのスケッチ): 『Reports of General MacArthur』の継続調査。

(3) 海外では韓国美術の調査を実施。韓国美術調査—国立現代美術館、ハッコジェギャラリー、移動と移民展(京畿道美術館) 郭仁植展(国立現代美術館・果川) 近代美術家の再発見展(国立現代美術館・徳寿宮館) チョン・ジョンヨブ展(イ・ウンノ記念館、忠清南道・洪城郡) バーバラ・クルーガー展(アモーレ・パシフィック・ミュージアム)+美術家・担当学芸員の面談調

(4) 国内外での調査を、美術批評の連載「Gender×アート」として、1年間(11回)『We Learn』に寄稿(日本女性学習財団発行)

(5) 公開研究会として、「「キューバの画家」とは誰を指すのか」を開催(関西ジェンダー史カフェと共催(キャンパスプラザ京都)。2019年2月のキューバ調査を発展させた本研究会については、2020年1月『関西ジェンダー史カフェ通信』にて報告。

(6) 初年度にAASで発表した *Reports of General MacArthur* の戦争画については、荒木光子に焦点を当てて報告書をまとめた。(北原恵『松本清張、未完の仕事: 「荒木光子の戦中・戦後」』(松本清張研究奨励事業研究報告書 / 北九州市立松本清張記念館編, 2020年3月)。

【2020年度(令和2年)】

2020年度はコロナ禍のため出張による調査や対面での研究交流ができなかったが、以下の調査・発表・研究会・出版を行なった。

(1) プロレタリア美術史の調査 - - 新井光子(八島光)研究。日本のプロレタリア美術運動に参加し、ファシズム政権の弾圧から逃れるために渡米し、生涯を米国で暮らした女性画家、新井光子について、文献資料を発掘調査し、生涯の前半期を詳細にたどった。10月18日「A Red Hat 赤い帽子」展調査、写真家・高橋健太郎へのインタビュー。生活図画事件調査

(2) 公開研究会として、研究会「戦争/革命表象における女性イメージ」を開催(10/23 於キャンパスプラザ京都、及びZoom。関西ジェンダー史カフェとの共催) - - 前田しほ氏(島根大学准教授)による、旧ソ連軍における寓意的女性像の実態と比較に関する発表。

(3) 上記の調査研究は、以下で発表・出版した。プロレタリア美術や1930-50年代の極東地域での美術交流を調査する研究会を立ち上げ、第1回目に新井光子について発表した(Zoom開催)

北米のアジア系ディアスポラの視覚文化に関する雑誌 ADVCA (vol.6, Brill, 2020 夏) に、谷口富美枝に関する論文を英文で掲載: Megumi Kitahara, “Transcending Borders” in the work of Fumie Taniguchi (1910-2001): Japanese women painters living in Japan/USA”, *Asian Diasporic Visual Cultures and the Americas* (Special Issue on “Transpacific Minor Visions in Japanese Diasporic Art”), vol.6, Brill, 2020, DOI: <https://doi.org/10.1163/23523085-00601006>

生活図画事件と高橋健太郎写真展について雑誌で紹介: 北原恵「高橋健太郎の「A Red Hat 赤い帽子」展——治安維持法下の「生活図画事件」」『ピープルズ・プラン』90号、2020年11月
プロレタリア運動の女性美術家・新井光子(八島光)について、日本語で初めてとなる研究論文を発表: 北原恵「新井光子(八島光)研究(1)——昭和初期、プロレタリア美術運動に参加した女性画家」、『待兼山論叢』54号、大阪大学文学研究科、2021年3月、ウェブ公開)

大阪大学の最終講義として「戦時下を生きた3人の女性画家」を発表、YouTubeで公開。

【2021 年度（令和 3 年）】

(1) 戦争を経験した女性美術家たちの作品・資料調査を行なった（赤松俊子、根岸綾子他を追加調査）。戦時下の女性美術家 3 人を取り上げた研究「戦時下の女性画家とジェンダー：長谷川春子・谷口富美枝・新井光子」を、お茶の水女子大学ジェンダー研究所主催のシンポジウム「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」で発表、2021 年 12 月。

(2) イトー・タリ研究。調査対象にしたアーティストのなかでも、日本軍「慰安婦」問題や沖縄の米軍基地、原爆など、戦争に関わるテーマで作品を作り続けたパフォーマンス・アートの先駆者、イトー・タリにインタビューするなど研究を進めた。しかしながら、調査の途中で、同氏が急逝したため、文献資料の収集とアーカイブ化に精力を注いだ。これらの成果は、今後ウェブサイトで公開し、イトー・タリの残した仕事を広く社会に広める予定である。また、このプロジェクトは、2021 年春に大阪大学の研究者を中心に結成した「フェミニズム&アート研究プロジェクト」と連携しながら調査を継続中。

イトー・タリに関する研究は以下で出版。北原恵「イトー・タリの新作パフォーマンス：「自分で額を撫でるとき」」(『ピープルズ・プラン』92 号、2021 年 5 月。北原恵「イトー・タリ」『美術手帖』(特集：女性たちの美術史を編む) vol.73 no.1089, 2021 年 8 月号。

(3) 国内で戦争に関わる主な関連展覧会調査を行なった。「さまよえる絵筆」展（板橋区立美術館&京都文化博物館）、「小早川秋聲 旅する画家の鎮魂歌」（京都文化博物館）他。さらに、日本人画家の制作した戦争画が大量に掲載され、GHQ が編纂した『マッカーサー元帥レポート (Reports of General MacArthur)』についても、文献資料を主に追加調査を行なった。

(4) 長谷川春子について、フランスを本拠とする女性アーティストのアーカイヴ AWARE で、紹介した。“Haruko Hasegawa” Archives of Women Artists Research & Exhibitions, AWARE, Paris, <https://awarewomenartists.com/en/artiste/haruko-hasegawa/>

【2022 年度（令和 4 年）】

当該年度は最終年度であるので、これまでの研究をまとめることに集中すると同時に、さらに新しく発展させることも目指した。

(1) 在日コリアンや戦争を経験した日本の女性美術家たちの作品・資料調査を行なった。

(2) 占領下、GHQ 参謀第二部の編纂した戦史『マッカーサー元帥レポート(Reports of General MacArthur)』に掲載された「戦争画」(特に「御前会議」の絵画)について調査を進め、「この国の芸術：「日本美術史」を脱帝国主義化する」(オンライン連続講義)で発表した(2022 年 12 月)同研究は 2023 年度に出版予定。G2 のチャールズ・ウィロビーのもとで『マッカーサー元帥レポート』の編纂を担当した荒木光子の関与を明らかにすることによって、従来の戦争画史の再考をうながした。

(3) 2022 年度に新しく着手したのは、敗戦直後(1946 年夏)日本美術会が作成したという「美術界に於て戦争責任を負ふべき者のリスト」について、作成の経緯の検証と、その後の言説や、リストがどのように研究資料のなかで引用されてきたのかについて調査・分析した。(北原恵「日本美術会「戦犯リスト」をめぐる、いくつかの疑問」『美術運動』no.150, 2023 年 3 月)

(4) 国内で開催された戦争に関わる主な関連展覧会調査を行なった。

(5) 日本の戦時下(1930 年~40 年代)の女性美術家について、5 月にメルボルンのビクトリア国立美術館で講演をネット配信した。“Women Artists during Wars in Japan: Border-Crossing, Exclusion, Oblivion”[Observations: Women in Art and Design History] by National Gallery of Victoria, May 7, 2022, On line lecture, NGV: Melbourne.) 同講演は、以下の論集に所収・出版された。Megumi Kitahara, “Women and Japanese modernism,” *Observations: Women in Art and Design History*, NGV (National Gallery of Victoria), March 2022.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計23件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 北原恵	4. 巻 92
2. 論文標題 イトー・ターリの新作パフォーマンスー「自分で額を撫でるとき」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ピープルズ・プラン	6. 最初と最後の頁 167-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北原恵	4. 巻 73(1089)
2. 論文標題 イトー・ターリ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 美術手帖	6. 最初と最後の頁 102-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北原恵	4. 巻 4
2. 論文標題 追悼イトー・ターリさん：常に時代を切り拓き、変えようとしたパフォーマンス・アーティスト	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 f visions	6. 最初と最後の頁 83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北原恵	4. 巻 223
2. 論文標題 喜多報告へのコメント	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 朝鮮史研究会	6. 最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Megumi Kitahara	4. 巻 vol.6
2. 論文標題 “ Transcending Borders ” in the work of Fumie Taniguchi (1910-2001): Japanese women painters living in Japan/USA	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Asian Diasporic Visual Cultures and the Americas	6. 最初と最後の頁 92-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1163/23523085-00601006	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北原恵	4. 巻 72
2. 論文標題 天皇制	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美術手帖	6. 最初と最後の頁 108-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北原恵	4. 巻 90
2. 論文標題 高橋健太郎の「A Red Hat 赤い帽子」展——治安維持法下の「生活図画事件」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ビープルズ・プラン	6. 最初と最後の頁 170-173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北原恵	4. 巻 91
2. 論文標題 美術界のハラズメントとフェミニストの連動：「ゲリラ・ガールズ展」(岡山)と「カナリアがさえずりを止めるとき展」(広島)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ビープルズ・プラン	6. 最初と最後の頁 177-181
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Megumi Kitahara	4. 巻 VIII-5
2. 論文標題 “Between Tradition and Modernity: Tracing the Artistic Career of Taniguchi Fumie”	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Register	6. 最初と最後の頁 40-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 北原 恵	4. 巻 85
2. 論文標題 小林喜巳子の版画 : 「彫刻刀で刻む社会と暮らし」展から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ピープルズ・プラン	6. 最初と最後の頁 164-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北原 恵	4. 巻 87
2. 論文標題 百島アートプロジェクト「百代の過客」 報告記	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ピープルズ・プラン	6. 最初と最後の頁 136-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北原 恵	4. 巻 784-794
2. 論文標題 連載Gender x アート	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ピープルズ・プラン	6. 最初と最後の頁 17-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 北原 恵	4. 巻 6
2. 論文標題 「討論のまとめ（キューバの画家とは誰を指すのか）」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関西ジェンダー史カフェ通信	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北原 恵	4. 巻 80
2. 論文標題 ウーマン・ハウス展を見て：全米女性美術館	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ピープルズプラン	6. 最初と最後の頁 164-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北原 恵	4. 巻 81
2. 論文標題 沖縄のディアスポラ・フェミニストが創る世界：ローラ・キナ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ピープルズプラン	6. 最初と最後の頁 167-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北原 恵	4. 巻 14
2. 論文標題 学問領域とジェンダー：天皇制研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ジェンダー史学	6. 最初と最後の頁 131-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北原 恵	4. 巻 83
2. 論文標題 市民の描いた戦争体験画 濟州島、「沖縄戦の記憶と絵」展から考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ピープルズプラン	6. 最初と最後の頁 168-172
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北原 恵	4. 巻 38
2. 論文標題 2018年度「方法論の会」の開催にあたって：絵本は戦争と暴力をいかに伝えるか？	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本学報	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北原恵	4. 巻 76
2. 論文標題 演劇「白い花を隠す」：NHK・ETV改ざん事件から、抑圧の連鎖を断つ試み	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ピープルズプラン	6. 最初と最後の頁 159-161
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北原恵	4. 巻 Vol.69 NO.1061
2. 論文標題 なぜ女性の偉大な戦争画家がいなかったのか 谷口富美枝の場合	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 美術手帖	6. 最初と最後の頁 102-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北原恵	4. 巻 78
2. 論文標題 ベトナムの現代史と難民を表現するーリー・ホアン・リー個展	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ピープルズプラン	6. 最初と最後の頁 159-161
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北原恵	4. 巻 51
2. 論文標題 日本画家・谷口富美枝の思い出、足跡をたどって 船田富士男氏に聞く	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 待兼山論叢	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北原恵	4. 巻 79
2. 論文標題 既存のモダンガール像に挑戦した日本画家 谷口富美枝 (仙花) 展	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ピープルズプラン	6. 最初と最後の頁 146-148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 12件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 北原恵
2. 発表標題 戦時下の女性画家とジェンダー：長谷川春子・谷口富美枝・新井光子
3. 学会等名 ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在 (お茶の水女子大学ジェンダー研究所シンポジウム) (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 北原恵
2. 発表標題 新井光子研究(1)――昭和初期、プロレタリア美術運動に参加した女性画家
3. 学会等名 新井光子研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 北原恵
2. 発表標題 アート・アクティヴィズム：戦時下を生きた3人の女性画家
3. 学会等名 北原恵退官記念最終講義(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 北原 恵
2. 発表標題 表現の不自由を越えて
3. 学会等名 百代の過客(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 北原 恵
2. 発表標題 あいちトリエンナーレ2019を振り返って 出品作品から考える現代社会
3. 学会等名 日本地方自治研究学会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 北原 恵
2. 発表標題 イルクーツク & サハリン調査その後：美術
3. 学会等名 「難民」の時代とその表現：1930-50年代北東アジアにおける移動と文化活動」（基盤研究B：坪井秀人代表）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 北原 恵
2. 発表標題 「戦後」イメージ再：『マッカーサー元帥レポート』の戦争画
3. 学会等名 広島市立大学平和研究所「戦後史再考プロジェクト」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北原 恵
2. 発表標題 戦争「体験」を描く絵画 沖縄・広島・空襲の「記憶」
3. 学会等名 済州4.3 70周年特別企画「沖縄戦の記憶と絵」国際シンポジウム）主催：済州4.3平和財団 & 済州大・平和研究所（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北原 恵
2. 発表標題 荒木光子の戦後史：『マッカーサー元帥レポート』を中心に
3. 学会等名 松本清張記念館 第39回研究発表会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北原 恵
2. 発表標題 谷口富美枝 (1910-2001) にとっての “Trans.” : 日本/USAに生きた女性日本画家
3. 学会等名 国際シンポジウム「環太平洋の日系ディアスポラ・アート」 主催：京都大学人文科学研究所 科研費基盤 (S) 「人種化のプロセスとメカニズムに関する複合的研究」 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北原 恵
2. 発表標題 《ディナー・パーティ》からゲリラ・ガールズまで
3. 学会等名 SEA (Socially Engaged Art) レクチャー+ディスカッション・シリーズ (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 北原恵
2. 発表標題 急増する現代の「戦争画」 作品と歴史的背景
3. 学会等名 15年戦争研究会、第209回例会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 北原恵
2. 発表標題 「戦争画」概念再考 「空襲」は銃後の図像か
3. 学会等名 「日本近代洋畫の養成及發展」國際學術研討會 (招待講演) (國際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 北原恵
2. 発表標題 Increasing Contemporary War Paintings and War Memories in Japan
3. 学会等名 The 2nd International Forum for war visual in Asia-pacific Area (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 北原恵
2. 発表標題 谷口富美枝の画業と足跡
3. 学会等名 呉市立美術館のあゆみ展講演会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Megumi Kitahara
2. 発表標題 Postwar US-Japan Collaborative Production of "War Painting" for the Reports of General MacArthur "
3. 学会等名 2018 AAS (Association for Asian Studies) Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 牟田和恵編 (執筆分担・北原恵他)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 262
3. 書名 改訂版：ジェンダー・スタディーズ 女性学・男性学を学ぶ	

1. 著者名 森暢平, 河西秀哉編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 222
3. 書名 皇后四代の歴史：昭憲皇太后から美智子皇后まで	

1. 著者名 坪井秀人編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 276
3. 書名 東アジアの中の戦後日本	

1. 著者名 キム・ヨン Chol、北原恵他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 現実文化研究（韓国）	5. 総ページ数 286
3. 書名 戦争と美術：ビジュアルの中のアジア太平洋戦争	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Art Activism: 視覚文化/ジェンダー研究 http://www.genderart.jp/ フェミニズム&アート研究プロジェクト https://www.facebook.com/artandfeminism2021/ Art Activism: 視覚文化/ジェンダー研究 http://www.genderart.jp/ Art Activism 視覚文化/ジェンダー研究 http://www.genderart.jp/ "Between Tradition and Modernity" https://indd.adobe.com/view/a0a8cd94-97ab-4831-8764-d8f0b210eaf0 "Japanese" Artist, TANIGUCHI Fumie (1910-2001) https://race.zinbun.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2018/11/Abstract_MKitahara_en.pdf Art Activism: Visual Culture / Gender Studies http://www.genderart.jp/</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 The 2nd International Forum for war visual in Asia-pacific Area	開催年 2017年～2017年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------